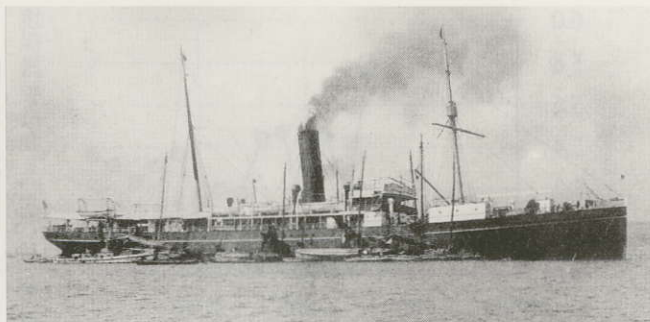
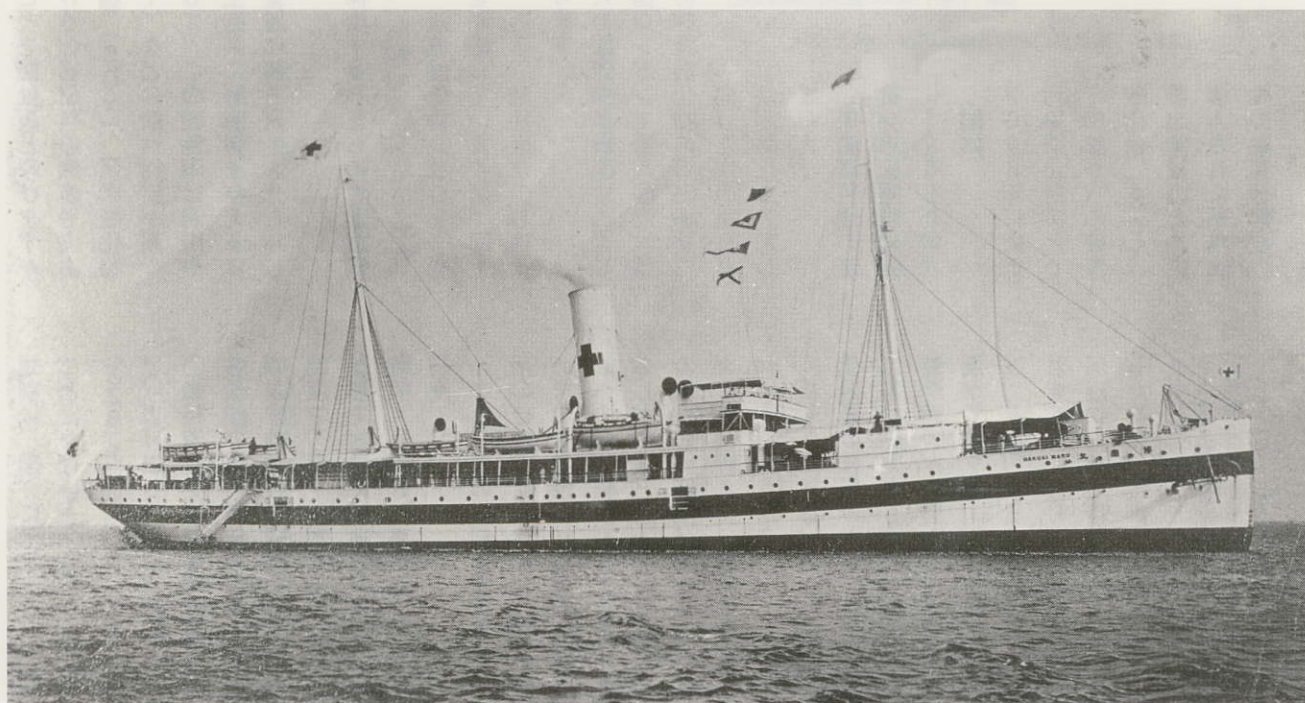


# 日本赤十字社が英国に発注し 建造した日本最初の 新造病院船

文・山田廸生（日本海事史学会副会長）



平時の「弘済丸」（筆者所蔵）



病院船「博愛丸」（筆者所蔵）

## 博愛丸・弘済丸

◀ 主要目 ▶ 病院船（戦時）・貨客船（平時）。日本郵船所有（日本赤十字社発注・建造）。鋼製。総トン数2,629トン、載貨重量2,480トン、垂線間長95.0メートル、型幅11.9メートル。主機3連成汽機1基、最大出力3,078馬力、最高速力15.3ノット。旅客定員293名。明治31年（1898）英ロブニッツ社Lobnitz & Co., Renfrewで建造、日本郵船に譲渡。翌年4月日本回着、近海航路に就航。北清事変・日露戦争で病院船として就役。大正15年（1926）林兼商店（長崎）に売却、蟹工船に変身。以後、船主を転々、漁業工船として稼働。昭和20年（1945）6月千島列島沖で米潜の雷撃を受け沈没。（以上「博愛丸」のデータ）



## 北清事変・日露戦争で活躍

第2次世界大戦まで日本には病院船があった。始まりは日清戦争である。日本史上初の近代戦争であるこの戦争で、日本海軍は日本郵船の貨客船「神戸丸」(2901総トン)を徴用し、病院船に改造して使用した。医療に従事したのは日本赤十字社(日赤)の要員である。いっぽう陸軍は、徴用船8隻に日赤要員を乗せ、輸送と病院の兼用船にした。

この実績から日本赤十字社は専用の病院船の新造を計画。2600総トンの鋼製汽船「博愛丸」と姉妹船「弘済丸」を英スコットランドのロブニツ社で建造した。船価は1隻約54万円。計画を主導したのは日赤の初代社長・佐野常民(佐賀藩出身)である。

日本赤十字社は日本郵船と契約し、竣工時に原価(20年払い)で両船を譲渡。平時は日本郵船が運航し、戦時は日赤が病院船として使用することにした。「博愛丸」は明治32年(1899)4月、「弘済丸」は同年6月に日本回着。郵船の近海航路に就航した。

両船が病院船になったのは、翌33年の北清事変のときだ。義和団鎮圧のため編成された8か国連合軍のうち、日本はロシアとともに最も多くの将兵を華北に派遣した。両船は事変勃発の同年6月病院船に改装。翌月から11月まで大沽(天津)字品を往復し、外国人兵士を含む

む多数の傷病兵を収容し輸送した。

そのあと日本郵船の定期航路に復帰。新聞の出帆広告によると、「博愛丸」は翌34年1月から横浜―上海航路、「弘済丸」は33年12月から神戸―基隆航路に就航している。続く日露戦争では、明治37年(1904)2月から翌年12月末まで、それぞれ50回以上の航海をおこない、ロシア兵士を含む2万7000名の傷病兵を収容し輸送した。

## 貨客船、鉄道連絡船、漁業工船

平時の「弘済丸」の側面図が山高五郎氏の『図説日の丸船隊史話』にのっている。「博愛丸」も同じ内装であろう。それによると主甲板(舷側白線部分)後部が1等、主甲板前部が2・3等、第2甲板前部が3等区画になっている。興味深いのは1等食堂(ダイニングサロン)が主甲板の船尾寄りにあり、両側に1等客室が並ぶ配置を採用していることだ。

東京海洋大学の重要文化財「明治丸」もそうになっている。1等食堂を揺れと振動が少ない船体中央部に移したのは、近代客船の原型である初代「オセアニック」(3707総トン)が最初だが、4半世紀以上も後の「博愛丸」級が古式を踏襲しているのには驚く。

両船とも日露戦争後、横浜―上海航路に就航した。明治40年(1907)3月の『旅行案内』によると、横浜―上海の運賃(食費込

み)は、1等54円、2等33円、3等12円。銀行員の初任給が35円の時代だから、1等の54円はかなりの金額である。食事は1・2等が洋食、3等は和食であった。

その後、鉄道院(のち鉄道省)に備船され、鉄道連絡船として活躍した。まず「弘済丸」は、明治45年(1912)6月から大正5年(1916)4月まで関釜航路(下関―釜山)に就航。そのあと11年(1922)11月まで青函航路(青森―函館)で稼働した。いっぽうの「博愛丸」は、大正7年(1918)4月から11年3月まで関釜航路に就航した。日韓併合後のこの時期、関釜航路では客貨が激増。本職の鉄道連絡船だけでは対応できないため、何隻もの備船を投入したのである。

大正12年の関東大震災では、両船とも被災地から清水へ避難民の輸送に従事した。そして大正末年、日本郵船から水産会社に売却され、漁業工船に転じた。一生のうちに病院船、貨客船、鉄道連絡船、漁業工船と、何回も姿を変えた船は珍しい。売却先は「博愛丸」が林兼商店(長崎)、「弘済丸」は八木商店(兵庫県高砂)、「美福丸」と改名。漁期には蟹工船、閑期は貨物船として働いた。

以後、船主を転々、漁業工船として稼働。「博愛丸」は昭和20年6月千島列島沖で、「美福丸」は同17年8月青森県沖で、ともに米潜の雷撃を受けて沈没、波乱の生涯を閉じた。